

(1) プラガ地区について ―ワルシャワのソーホー<sup>18)</sup>

ワルシャワの都心、旧歴史地区とヴィスワ河を挟んだ西側の対岸(右岸)はプラガ地区と呼ばれる。プラガはチェコのプラハと同じ発音であるが、プラハとは関係ない。15世紀頃からプラガの町があったが、対岸のワルシャワ都心と結ぶ橋がかかる18世紀にはワルシャワ市に合併された。

同地区に建つサッカー・スタジアム(後述)とプラガ地区の間には古い港湾施設跡が残っており(これも近代産業遺産)、鉄道の引込み線やジャンクションが錯綜し、現在でも多くの工場が集積する工業地帯である。

この地域は、幸いにも第2次大戦時の戦禍を潜り抜け、工場など戦前の建物が多く残る。

戦禍を免れた背景にはソ連軍の動向と「ルジツキ市場(バザール) Rozycki Bazar (Bazar Rozyckiego)」がある。地区にはモスクワやベルリン方面の長距離列車の始発駅であるワルシャワ東駅(Warszawa Wschodnia)がある。東駅と、後述する新しいショッピング・センターの間、「タルゴヴァ(Targowa) 通り」に面して古い市場(バザール)がある。19世紀からある市場で、冷戦時代にも賑わっていたとされる。タルゴヴァというのは市場と言う意味で、「市場通り」という名前はこの地に12世紀頃からあった村の名前「市場村」に由来するとされ、ヴィスワ河などの東西交易の拠点であったことが窺える。ワルシャワ蜂起が起きてドイツ軍が市街地を徹底的に爆破した1944年、終戦前にこの市場(バザール)にソヴィエト赤軍が既に進出しており、この周辺だけがドイツ軍による破壊を免れたとされる。それでも街のそこそこには大戦時の銃弾の跡などが残る。

なおこのソ連軍は、ワルシャワ旧市街で蜂起した市民を助けず、対岸から「高みの見物」で蜂起軍とドイツ軍が互いに潰しあうのを傍観していた。アンジェイ・ヴァイダ監督の映画「地下水道(1956年)」はこれを描いている。このため、「解放」後もポーランド人がソ連によい感情を持っていなかった原因の一つとなっている。

近代以降の建築とそれ以前のものが雑然と混在する市街地は、歴史的にも文化的にも旧市街に比べて見劣りするので、冷戦期には都市開発の波に取り残されて、ほとんど凍結保存されるように残存していた。

老朽化した工場は放置される一方、冷戦終了後には冷戦期に建てられた労働者向けの安いアパートなどに、産業構造の変革で失業したポーランド人や流動化した東欧やロシアの人々(その多くが貧困層)が住み着き、典型的な工業衰退地域の危険地域となっていた。実際、当時の旅行記などを見ると、日本大使館から「そこは危険だから旅行者は行かないように」とアドバイスされていたようである。

このプラガ地区が、21世紀には新しいアートの情報発信地として脚光を浴びている。

安い家賃の古い工場や倉庫に若いアーティストが住み着き、これを支援するNPOなどが集まるという現象は、20世紀の終わりごろから世界各地で見られ、発祥の地のニューヨークにちなんでいわゆる「ソーホー(SOHO)」地区と呼ばれる。当該地区も「ワルシャワのソーホー」とも呼ばれ、古い工場やアパートなどを再生してアトリエ、画廊、前衛劇場、いわゆる「クラブ」、パブなどが自然発

生的に出現した。従前の「非合法で危険な」雰囲気も、地区の個性の一つとして地区の魅力の一部を担っているものと見られる。

中でも注目されているのが「ファブリカ・チュシュチヌィ」で、近代産業遺産である旧マーマレード工場や靴工場だった工場を改装したもので、多くの文化イベントも開催されている。

なお、ヴィスワ河沿いにプラガ地区のすぐ南東、2012年1月29日にサッカー・ヨーロッパ選手権を目指して開場した新しいワルシャワ国立競技場(Stadion Narodowy)が建っている。鮮やかな赤白の外壁(夜はライトアップされる)と観客席の吊り屋根の構造が特徴的な外観で、対岸の旧市街からもよく見える。これは、かつてここにあった「十年スタジアム(Stadion Dziesięciolecia)」を解体して新設したものである。解体撤去前の旧スタジアムの遺構、通称「スタディオン(Stadion)」には、当時ヨーロッパ最大の屋外市場(バザール)があった。老朽化して放置されていた古いサッカースタジアムをそのまま使っており、楕円形の傾斜観客席のスロープも使われていた。これも、広義の近代遺産の活用と言ってよいかも知れない。しかもオフィシャルではない完全に草の根の非公式である。

2000年代、この地区がもっと危険な地区であった時代、ポーランド人はもとより、ロシア人やウクライナ人、ベトナム人などの市場が立ち、違法な商品(模造品、海賊版や横流し品など)を含む多種多様な格安物資の販売で人気を博していた。共産圏が崩壊した後の空白時期、一種の無法地帯が出現していたようで、こうした当局の目の届かない隙間で、目端の利く人々は短期間に大きな利益をあげていたことが推察される。前項のポズナンの事業家グラジナ・クルチェクがひと財産築いた時期である。

ロシア人やウクライナ人に加えてベトナム人市場があったということであるが、冷戦期には多くの北ベトナム人や北朝鮮人が東側で労働者として働いていたことが背景にあるのであろう。筆者も冷戦期にソ連・東欧を訪れたときは、若い東洋人と見るや「カレイスキー(朝鮮人)か?」と聞かれて戸惑ったことがある。当時北朝鮮はソ連との貿易の見返りに多くの若い労働者を「輸出」していたのであるが、彼らが冷戦終了後も東側に残って、こうした隙間の商売に乗り出していたと考えられる。ちなみに、日本人だと告げると次の反応は「シュポルトマン?」という慣れない英語で、若い日本人は国際試合の選手くらいしかソ連国内を歩いていなかったという時代である。

(2) 沿革<sup>19)</sup>

プラガ地区のアシュモロヴィズナ(Szmulowizna)に立地する施設のもととなった最初の工場の建物は1916年に建てられたものだ。以前は「マーマレード製造工場」「缶詰食品加工工場」「ポーランド・ゴム工業」などが相次いで操業していた。

2001年、同工場は作曲家で音楽・テレビ・プロデューサーのヴォイチェフ・トゥシチンスキ(Wojciech Trzcinski)に見出され、約2年かけて内外装を改装した。同施設の現在の外観はボグダン・クルチンスキ(Bogdan Kulczyński)、ヨアンナ・クルチンスカ(Joanna